

感想カードから見るモーリス・ユトリロ展

伊澤 朋美

0はじめに

2010年7月10日から8月25日にかけて近代美術館で「モーリス・ユトリロ展」が開催された。本展覧会は、ユトリロの画風の変遷を追うとともに、ユトリロの波乱の生涯を紹介するもので、47日間の会期中、当初の17,400人という見込みを大きく上回る25,894人もの方が会場を訪れた。これだけ多くの人が展覧会に足を向けた要因としては、約90点の出品作すべてが日本初公開という話題性や、連日新聞に関連記事が掲載されたこと、夏休みの時期に重なっていたことなどが考えられる。これらを外的要因とすると、ユトリロ展を人々がどのように受け止めているのかという内的な要因は一体何だったのだろうか。

会期中、来場者が自由に感想を書けるコーナーを展示室内に設置した。その感想の内容から、ユトリロ展に対する来場者の意識が見えてくるのではないだろうかと考え、以下感想の傾向を探った。

1 感想コーナーの設置と掲示・回収方法

感想カードは、来場者がユトリロ展の感想を自由に記入し、また他の来場者の記述を見ることで、ユトリロ展での感動を来場者同士が互いに共有することを目的に設置したものである。

展覧会場内出口付近に机と椅子を用意し、カード記入場所を用意、周囲の壁面に感想が記入されたカードを貼っていき、「ユトリロ展感想コーナー」とした(図1)。感想カードはA 6モノクロで(図2)、所属は書かず、感想のみ記入する形式である。机の上にまとまった枚数を置いておき、来場者が自由に手に取れるようにした。記入したカードは、同じ机の上にある回収ボックスの中に入れてもらい、回収時“ユトリロ展の感想”にそぐわないものがないか、学芸員がチェックした。

会期途中、カードを貼る壁面のスペースが足りなくなり、重複する感想はできる限り省いて掲示し、様々な感想を見ることができるような状態とした(図3)。



図1 展覧会場内出口付近に設置されたユトリロ展感想コーナー

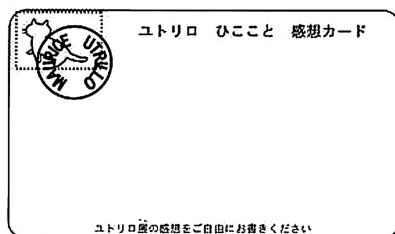


図2 感想カード

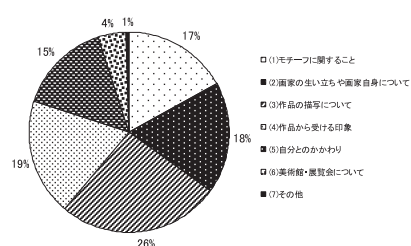


図3 記入されたカードを貼った壁面

2 集計結果

回収した感想カード数は778枚、“ユトリロ展の感想”として有効なカード数は757枚だった。感想の傾向はおおよそ以下7つの傾向に分けることができる。また、カードの文章の中

から、感想の内容を端的に表しているキーワード(例：モンマルトル、白、奥行き、色づかい、生い立ち・・・等)をひとつ抜き出し、この7つの傾向に分類した。集計の結果は以下の通りである(グラフ1)。



(グラフ1) 感想カード集計結果

(1) モチーフに関すること(パリや建物など、描かれたモチーフに関する感想)

- 129枚
- (2) 画家の生い立ちや画家自身について(ユトリロの人生や母親などに関する感想) 135枚
- (3) 作品の描写について(色彩やタッチ、構図などに関する感想) 199枚
- (4) 作品から受ける印象(穏やか、哀しいなど作品から受ける印象に関する感想) 142枚
- (5) 自分との関わり(ユトリロが以前から好き、このような絵を描きたいなど自分に関わる感想) 115枚
- (6) 美術館・展覧会について(展覧会の構成や、美術館の設備に関すること) 33枚
- (7) その他(1～6いずれにも分類できないもの) 4枚

3 感想の内容と傾向

ユトリロの白と色彩

最も多かった感想が「(3) 作品の描写について」で199枚だった。中でも豊かな色彩に言及した感想——「ユトリロ白のイメージだったが、実は色もすごい」「空の色の描き方が、とても印象的でした」「ユトリロの絵と言えば、有名な「白の時代」の作品ばかりしか知らなかったもので、若い頃から晩年まで、特に『色彩の時代』の作品を知ることが出来て、大変勉強になりました」——が107枚と半数以上をしめた。対して、ユトリロの作品の中で最も評価の高い初期の「白の時代」に関する感想は199枚中31枚と少なかった。

これは本展覧会が、ユトリロの画風の変遷をモンマニーの時代、白の時代、色彩の時代、晩年という時代区分に依りながら、たどっていくものであったが、白の時代の作品は多くなく、色彩の時代以降の作品が大部分を占めていたことによる。集計の結果にはこのことが影響していると考えられるものの、このような構成だったからこそ、「ユトリロ＝白」という構図から来場者は新たな価値を見出したとも言える。

明るいユトリロ作品

悲哀、孤独、憂愁——数奇な人生を歩んだ画家ユトリロを形容する言葉とイメージである。展覧会構成に関係してか、「(4) 作品から受ける印象」の感想カードからも「優しく温かみのある絵」「こんなに明るい絵を書く画家とは思いませんでした」「心が安らぐ絵ですね」「きれいだった」——など従来のイメージとは対極的な感想が142枚中43枚と約3分の1をしめた。「明るい色彩の絵もどこか憂いを帯びたよう」「ユトリロの絵は寂しい」「切なくなる」といった従来のイメージによった感想8枚よりはるかに多い。

苦悩ゆえに純粋なまなざしでパリの街角を見つめたユトリロの素朴さを、来場者は感じ取ったのか、従来のイメージを離れて来場者がそれぞれの見方でユトリロ作品を感じ取っている姿勢が伺える。

ユトリロの生涯と女性嫌悪

「愛情にうえた分、絵に感情が強く入っている」「この母親だったからこそユトリロという画家が出てきたのかも」「ユトリロは本当に幸せだったのでしょうか？」——など、「(2) 画家の生い立ちや画家自身について」

が135枚と、ユトリロの人生に共感したり、心情を推察したり、あれこれ想いをめぐらせた来場者が多かった。また、次のような特徴が見られた。

ユトリロの描くおしりの大きな女性(図4)、この特徴的な女性の描写について、会場内では「ユトリロの女性嫌悪の表れではないか」という解説パネルを掲示していたが、これに対し、来場者が別の見方を示した感想がいくつか見られた。「さかさまのチューリップのような女性の姿。嫌ってたんじゃないと思う」「嫌いじゃなく、心の中で反発した反動が大きなおしりに表現されたのでは?」「女性に嫌悪感を持つ一方で、女性に認められたいという思いもあったのではないのでしょうか」——など、ただ受け身に解説を受け取るのではない来場者の鑑賞態度が垣間見られた。

自分とユトリロ

「(5) 自分との関わり」を述べた感想が115枚と多かったのも、特徴的な傾向と思われる。感想を見てみると、2000年に新津美術館で開催された「ユトリロとヴァラドン展」や、1967年の「ユトリロ展」を見た、という感想も見られ、すでにユトリロの作品を見た経験があり、ユトリロの作品を好んで来場したという来場者も多く見られた。また、「ユトリロの名前を初めて知った展覧会」「ふだんは、美術などあまり興味がなかったけどいつのまにかユトリロさんの絵に吸い込まれていた」と、中には今回初めてユトリロを知った来場者もいたことがわかった。

また115枚中3割は「私もユトリロさんのような絵を描いてみたい」「絵を学ぶ者として、とても刺激されました」など向上心を刺激されたという内容であり、独学で絵を学んだユトリロの境遇や、作品の印象・雰囲気から創作意欲をかきたてられたのだと思われる。

4 おわりに

以上のように感想の傾向としては、ユトリロの人生や作品描写に関心を持ち、自分との関係の中で展覧会を見ているものが多かった。今回は詳しく述べるができなかったが、パリ、モンマルトルへの憧れを感じている来場者も多かった。ユトリロの人気や知名度も、多くの来館者を惹き付けた要因のひとつだったと考えられる。

今回感想カードを設置することで、来場者の関心や鑑賞の様子を把握することができた。



図4 “おしりの大きな女性”が描かれた
ユトリロの作品《17区の通り》1924年
油彩／キャンヴァスに貼った紙

また、来場者が他の来場者の感想を眺めることで、来場者同士のコミュニケーションとなっただけでなく、さらには来場者が解説文に対し新たな見方を示すなど、美術館と来場者間のコミュニケーションともなる事例が見られた。

来館者にとって魅力ある展覧会や関連事業を展開していくには、このように来館者の“声”を知ることが重要である。今回の成果を踏まえ、今後もこのような相互作用的な活動を行っていきたい。

今回、感想カードの内容をまとめるにあたり、当館嘱託員の皆さんにご助力いただきました。この場をかりて感謝いたします。

(新潟県立近代美術館 美術学芸員)

Maurice Utrillo Exhibition Seen from “Impression Cards”

IZAWA, Tomomi

A great number of people visited the Maurice Utrillo exhibition held at the Niigata Prefectural Museum of Modern Art from July 10th through August 25th, 2010. In the exhibition room, there was a corner set up where visitors could freely write their impressions on cards. I studied what visitors had written on the cards to search for trends in how people received and responded to the Utrillo exhibition.

A total of 778 impression cards were collected, 757 of which gave impressions of the Utrillo exhibition. There were seven major trends in the impressions. A lot of visitors were interested in Utrillo's turbulent life and the expression in his art, and saw the exhibition in relation to themselves. And Utrillo's popularity and his reputation was one of the factors that attracted many visitors to the museum.

Through setting up the impression card corner, it was easy to understand visitors' interests and what they appreciated. It is important to hear visitors' “voices” like this in order to develop attractive exhibitions and related events. I hope to do more interactive events such as this in the future.

(Assistant Curator, The Niigata Prefectural Museum of Modern Art)